

学校と地域の連携による
豊島区西池袋中学校内の居場所づくり
2024年度 事業報告書

「にしまるーむ」によろこそ！



認定NPO法人

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

はじめに

西池袋中学校内の居場所「にしまるーむ」は、豊島区教育委員会、区立西池袋中学校、認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークの共催で、学校運営連絡協議会の協力のもと、2023年5月にオープンし、2年目となりました。

不登校の小中学生の数は、ついに34万人を超えました。1990年代に2倍3倍と増えていき、当初は「個人の病理」としていた文部科学省も、「誰にでもおこりうること」と方針を変えています。

2000年になると13万人弱で高止まりしていたのですが、この6年間、コロナの前からじわじわと増加していき、コロナが拍車をかけました。

全児童・生徒にタブレット等のツールが配付され、家にもオンラインで授業を受けられ、先生とチャットでやり取りができる。YouTubeにはありとあらゆる学習動画が並び、学ぼうと思えばオンライン上の教材がたくさんあります。

学校に行かなくても、自分の居場所が地域にあって、そこで元気に活動できているなら良いのですが、多くのひきこもっている子どもたちが心配です。人と交流しないと学べないことはたくさ

んあります。人との関係性で傷つくことはあるけれど、喜びも人とのリアルな関係性の中にあると思います。

「教室には入れないけれど、『にしまるーむ』だったら行ける」という子どもたちがいてくれるのはうれしいことです。放課後、元気いっぱいやってくる子どもたちとの交流も生まれています。親や先生以外のスタッフが寄り添ってくれて、安心して過ごせる。自分の抱えている悩みをポロっと口に出すことができる居場所です。

本報告書では、他地域での取り組みも紹介されています。今後、学校内の居場所づくりが広がり、すべての中学校に「にしまるーむ」のような居場所ができることを願います。

認定NPO法人
豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
副理事長 天野 敬子

目次

- ◇はじめに ②
- 1 「にしまるーむ」によろこそ！ ③
概要/「にしまるーむ」の一日
- 2 〈特別寄稿〉中学校内居場所「にしまるーむ」の意義 ⑤
日本福祉大学 社会福祉学部教授 野尻紀恵
- 3 「中学校内の居場所サミット2024」報告 ⑨
- 「にしまるーむ」実践報告 ⑩
利用生徒の声/「にしまるーむ」へのメッセージ
- 事例紹介①「やぎカフェ」西東京市立柳沢中学校 ⑭
- 事例紹介②「ASK」足立区立花保中学校×カタリバ ⑮
- 事例紹介③「SBSルーム」板橋区立板橋第三中学校 ⑰
- 公開情報交流会 ⑳
- 「つながりたい」と思う気持ち ㉓
特定非営利活動法人パノラマ理事長 石井正宏
- ◇応援メッセージ ㉔
- ◇おわりに 地域から新しい〈フツウ〉をつくろう ㉖

1

西池袋中学校内の居場所 / 「にしまるーむ」によるこそ！

2023年5月にオープンした「にしまるーむ」は、生徒が気軽に立ち寄り、思い思いに過ごせる居場所です。

学年やクラスの違う生徒と一緒に遊び、おしゃべりしています。さまざまな背景をもつ生徒が、教室や部活動とは異なる居場所で、運営スタッフに見守られながら、安心して過ごしています。

ここは先生でも親でもないおとなにつながる「プラットフォーム」でもあります。

● 「にしまるーむ」のあゆみ

2023年

- 3月 豊島区教育委員会と「中学生の居場所づくりモデル事業に関する協定」を締結。西池袋中学校をモデル事業実施校に選定
- 5月 「にしまるーむ」オープニングセレモニー開催
- 6月 生徒の声を聴くワークショップ開催
- 8月 「IKEA Family 子ども募金」（イケア・ジャパン株式会社 IKEA原宿 IKEA渋谷 IKEA新宿）の協力によりインテリアをリニューアル
- 9月 「学校の中に先生や親以外の大人がいる意味と価値―校内居場所カフェの実践から考える」としま区民センターでイベント開催
- 10月 週1回開室から週2回へ拡大

2024年

- 1月 さらに週2回から週3回開室に
- 2月 「第18回社会貢献活動見本市・地域活動が次世代に何を残せるか」展示発表。「東京海上日動火災保険池袋支店賞」受賞
- 3月 『news every.』（日本テレビ）特集番組にて紹介される（次頁参照）
- 9月 「中学校内の居場所サミット2024」開催

● 「にしまるーむ」概要

- 場所：西池袋中学校 生徒玄関前のホール
- 対象者：西池袋中学校生徒
- 運営日：定期テストや学校行事の際を除き、原則毎月・火・金曜日2部制/第1部13：30分～15時（教室に入りにくい生徒が利用）/第2部15：30～17：45（だれでも利用）
- 共催：豊島区教育委員会、豊島区西池袋中学校 認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
- 協力：「にしまるーむ」を応援する地域の方

Everything is going to be fine

I am sure it will be fine!



生徒の力作
ウエルカムボード

☆キラーン

Do your best!



本日の
担当スタッフ
掲示してます
(o^-^o)/

パーティションを
取り払い、
2部 OPEN準備中



ウエルカムボード
つくってます！

「IKEA Family 子ども募金」の協力により、レイアウト
とインテリアをリニューアル





認定NPO法人

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

「にしまる一む」の一日

等身大の自分で過ごせる居場所を

運営スタッフ 馬橋はな

13:30 1部 OPEN

普通の会話
できるのが
特別！



常連だから
スタッフみた
いなもんだ
よー



1部利用の生徒とは、最近あった出来事を話し合ったり、趣味の話に花を咲かせたり、何気ない日常会話をして過ごしています。生徒から、「普通の会話ができることが特別」という言葉をもらい、とても嬉しく感じました。

スタッフがチラシや掲示づくりで行き詰まった時には、普段はおとなしい女子生徒が監督に大変身！「ここはこうした方がいいんじゃない？」「この色の方が絶対合うよ！」と的確な指示で手助けしてくれます。アドバイスにスタッフが感謝すると、「私はこの常連だから、もうスタッフみたいなもんだよ」と答えてくれました。彼女の真剣な表情から、「自分も『にしまる一む』をつくっているメンバーの一員なんだ」という思いが伝わってきました。

15:00 1部 CLOSE

15:30 2部 OPEN



2部を利用する生徒からは、「『にしまる一む』でメンタルを安定させている」という声が多くありました。「人生ゲーム」をしたり、学校や塾の課題に取り組んだり、PCでプログラミングをしたり、スタッフと話したりと過ごし方はさまざまですが、日々のストレスを「にしまる一む」で解消しながら学校生活を送っているようです。

生徒が等身大の自分で過ごせる居場所をこれからも目指していきます。

17:45 2部 CLOSE <またねー！

人気▶



TV報道情報

07L 『news every.』で注目されました！

不登校対策に注目した『every.特集』で、「にしまる一む」が紹介されました。
<日本テレビ/2024年3月27日放送>

QRコードから視聴可能です。
ぜひご覧ください。



社会

【学校】不登校だったけど… 生徒に希望を与える“新しい居場所” 公立中学校とNPOの取り組み 『every.特集』

07L

2024年3月30日 12:22



2 〈特別寄稿〉

中学校内居場所「にしまる一む」の意義

野尻 紀恵 日本福祉大学 社会福祉学部教授

*2024年9月に視察いただきました

はじめに

「ふつうに学校に通いたいだけ」「なにごともなく1日が終わるだけでいい」「かなえられないとわかっている夢は持たないようにしている」……子どもがぼろっと漏らす。こんなにも豊かに見えるこの日本で、安心安全な暮らしが守られない子どもや、笑顔輝く毎日を送ることができない子ども、人権や人としての発達さえも保障されない子どもがたくさん存在する。子どもの生活の質の向上のためには、「～ができるようになる」ということを目標とはしない支援が必要だと考える。

乳幼児から学齢期へ、学齢期から若者期へと切れ目のない支援のつながりができるためには、特に学齢期の子どもたちを支援するための「学校とその周辺フォーマルおよびインフォーマルな社会資源の連携」の経験を積むことが必要である。保健・医療・福祉・教育の分断を乗り越えていくための接着剤的ツールとして「にしまる一む」のような中学校内居場所が必要なのではないか。

子どもが地域社会の中で安心して暮らすことができるような「居場所支援」の中でも、中学校内居場所支援の意義について考察する。

地域における子ども支援の課題と可能性

地域における子ども支援には、「地域の居場所と学校との接点ができない」「情報がつながらない」「子どもの生活課題に必要な支援が届いていない」とは言い難い。「それぞれの取り組みが〈点〉であり地域に支援の〈面〉を作ることが難しい」「この地域にどのような取り組みがあるのか活動

者自身も把握できていない」というような、さまざまな課題があげられている。

貧困、虐待、不登校、いじめ等、子どもを取り巻く問題は複雑化・多様化している。地域によっては過疎化の進行による子どもの数の減少や地域住民同士のつながりの希薄化、そして、ひとり親家庭の増加による家庭の孤立等といった問題も深刻化してきている〔野尻2018〕。

子どもの問題は、子ども本人だけではなく、その家族が問題を抱えているケースが少なくない。したがって、子どもおよび子どもを取り巻く家族全体を含めた包括的支援が必要不可欠である。また、複雑化・多様化した問題を解決するにあたっては、一人の専門職が抱えて支援することは難しく、さまざまな専門性をもった専門職が多職種連携すること、インフォーマルな社会資源も含めた地域全体における包括的支援体制を構築することが求められている。

これまで、子どもは「対策」の対象であり、困っている子どもの顔が見えない状況であった。子どもの包括的支援体制を構築していくにあたっては、実際に困っている当事者から学ぶことが必要であり、困っている人の「声を聴く」場所としての居場所が必要である。さらに、その居場所は、困っている人が自ら選び取れることが重要である。

Bethell et al. [2019] は、「ポジティブな幼少期の体験は、成人期の精神および人間関係の健康と関係がある」「幼少期逆境体験 (ACE) があっても、他者からの感情に働きかけるサポートはACEの影響を軽減させることが期待できる」という調査結果を発表している。



まさに、「にしまる一む」という中学校内居場所では、さまざまな困難を抱えているかもしれない子どもが、地域の人々に出会うこと、その出会いの中で他者から感情に働きかけられるサポートをされる経験をする。「にしまる一む」は、そこに立ち寄る子どもたちにとって、逆境体験・もしくは逆境体験に近い経験からの回復につながる居場所といえるだろう。

学校という場の課題と可能性

OECD（経済協力開発機構）の「生徒の学力到達度調査」では、子どもが学校生活をどのように感じているか（調査では学校への所属感と捉えている）について調べている。2003年調査では「学校ではよそ者だと感じている」や「学校は気後れして居心地が悪い」といった設問に対して、日本の子どもたちの多くが、「とてもそうだと感じている」「そうだと感じている」と答えている。多くの子どもが学校で、疎外感を感じているということである。さらに、2012年調査の結果は、これらの学校への所属感はさらに低下していることがわかった。

学校は、子どもの生活の中で中心的な位置づけの場である。そのような学校生活において、子どもたちが感じる疎外感があるということは、子どもが育っていくプロセスに課題が生じる恐れが高い。

一方、学校は地域の福祉施設〔鈴木2018〕ともいえ、子どもたちが必要な時に必要な支援へとつなげることができるプラットフォームとなりうる。しかし、学校が地域の福祉施設になるために、学校自体を育むのは地域であり、多職種連携と地域住民との協働のもとで、「何をやるのか」

「なぜやるのか」を考えていく必要がある。そのためには、地域住民の活動をバックアップし、つなぎ合わせるキーパーソンが必要である。「にしまる一む」は、西池袋中学校の校長はじめ教職員、そしてこの取り組みを实践する認定NPO法人「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」のスタッフが、つなぎ合わせのキーパーソンとなり、中学校内にプラットフォームを創りあげること成功したのである。

地域住民の知恵や工夫を、中学校内においてで

きるだけありのままの姿であらわそうとし、さらに「してもらう・してあげる」対象としての子ども理解からの転換をはかり、子どもたちが学校的な生き方の中で眠らせてしまいがちな自身の力を発揮できる場となっている。地域・学校を変容させる「仕掛け」が「にしまる一む」にはあると考えられる。

実際に「にしまる一む」の活動に参加して、「にしまる一む」は「子どもが素顔になれる場所」「子どもが地域の大人と知り合いになれる場所」「子どもの『できる』が創り出される場所」「子どもが生きる『知恵』を教えられる場所」「子どもが自分の良さを発揮できる場所」「地域の大人が子どもを中心に集まれる場所」「子どもの課題に特化せず誰もが参加できる場所」「子どもの変容がよく見える場所」「大人も変容する場所」として、地域における西池袋中学校の存在意義を示すものとなっていると感じた。

ケイパビリティ・アプローチの場としての意義

アマルティア・セン [2011] は、「ケイパビリティ・アプローチ」という考え方を導入した。ケイパビリティ（潜在能力）とは、ある人が価値を見出し選択できる「機能」の集合のことであり、その人に何ができるかという可能性を表している。ケイパビリティは「各人が実現しうる暮らしや自由によって正義を理解するという考え方に直接的に適合している」とし、「暮らし」「自由」「資源」「幸福」「福祉」「平等」とケイパビリティについて論じているのである。これは、「にしまる一む」という中学校内居場所づくりにとって重要な考え方であるといえる。

また、レイヴ&ウエンガー [1933, p10-12] は居場所で当事者とスタッフが状況を共有することは、「社会的環境の中にある共同体で行われている社会的実践のために必要な場」と述べている。このような状況を共有することによって、スタッフは当事者性を深めていくのである。このような出来事を辻 [2017, p13] は、「身の回りの人が理解することが一番大事なことだ」と述べている。

子どもはそこに集う多様な大人から生活を学び

価値観を見つけ出すかもしれない。そこに集う大人は支援者でもあり、子どもから社会の矛盾や課題を学ばせてもらう学習者となる場合もあるだろう。このような相互関係が存在することにこのような「場」の持つ意義がある。

例えば、Aさんを「しかたないから」「支援してあげないと成り立たない家庭だから」とサービスをつなげても、それはAさんの困り感に伴走するような支援にはならない。サービスや制度は一見「寛容」に見える支援であるが、実はそこには「人」がつながることはなく、「無関心」の中で「寛容」なサービスが展開されるだけである。一方で、「にしまる一む」の取り組みは、Aさん自身にとって居心地のいい場を提供するという姿勢でAさんに接することができる。Aさんが「人」と出会う瞬間を創り出せるのである。「人」と出会うということは「無関心」からの脱却であり、Aさんの存在が一気に陽に当たる瞬間になるだろう。

そして、Aさんが「にしまる一む」という場で体験を積むことにより、内にある可能性をうっすらと感ずることができたり、その場に関わる人々に支えられる安心感の中で、自身の中にある「価値」のある能力に少し光が当たり始めるだろう。このように捉えると、「にしまる一む」では、まさにケイパビリティ・アプローチが個々の子どもに届けられている実践なのだと考えられる。

参加する子どもたちの笑顔や変容は、スタッフ自身が参加者を「支援対象者としての子ども」から「輝き、力のある子ども」へと捉え直しに導く。よって、「にしまる一む」での活動者自身もそこに参加することで、安心したり、くつろいだり、元気になることができるのではないだろうか。また、子どもや活動者のそのような姿を見ることによって、中学校の教職員にも安心や元気が届けられる。つまりさまざまな人々が支えたり、支えられたりが相互に起こる場、ともに理解し合い認め合える場、となる可能性が高まるといえる。

このような出来事を端的に表現したのが、辻[2017, p13]である。辻は「滋賀の縁創造センター」開催の「この子らを世の光に～子ども食堂全国交流会in滋賀」のセッションで、「身の回り

の人が理解することが一番大事なことだ」と述べ、「その人を理解して、ともに生きるという目を持っている人がまわりにいることが、まるで空気のように必要なんです。それと同じように、生きづらいお子さんのことを理解して、見守っているという目が空気のように大切なものなんです」と表現している。

子どもの権利の視点

「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」は、子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められた条約である。1989年第44回国連総会において採択され、1990年に発効した。日本は1994年に批准している。

子どもを権利主体と位置づけ、大人と同様にひとりの人間としての人権を認めている。一方、成長の過程で特別な保護や配慮が必要な子どもならではの権利も定めている。

子どもの権利条約の精神=3つのPとは、保護される権利（Protection）、提供される権利（Provision）、参加の権利（Participation）である。保護される権利（Protection）は、差別なく生命・生存を保障される権利、父母・大人・社会から愛される権利（愛護への権利）、児童虐待その他あらゆる暴力・抑圧から保護される権利が含まれている。提供される権利（Provision）は、子ども期にしかできない遊びの環境・条件を享受できる権利、無償かつ適切な保育・教育への権利、社会保障（子ども手当等生活保障、医療、児童福祉）への権利がそれに当たる。参加の権利（Participation）は、子どものことを子ども抜きに決めさせない権利、保育・教育等の計画に子どもの気持ちを取り入れさせる権利のことである。

子どもの権利に関する宣言において示されている「児童は、身体的及び精神的に未熟であるため、その出生の前後において、適当な法的保護を含む特別な保護及び世話を必要とする」ことに留意し、以下の4つを柱（一般原則）としている。

- 生命、生存および発達への権利（第6条）
- 差別されない権利（第2条）
- 子どもの最善の利益（第3条）
- 子どもの思いと気持ちの尊重（第12条）



1994年5月22日に効力が生じる前の、平成6年5月20日、文部事務次官によって、「児童の権利に関する条約」について（通知）が出された。その通知には重要な点が3つあげられている。1つ目は「学校教育及び社会教育を通じ、広く国民の基本的な人権尊重の精神が高められるようにするとともに、本条約の趣旨にかんがみ、児童が人格を持った一人の人間として尊重されなければならないことについて広く国民の理解が深められるよう、一層の努力が必要であること」。

2つ目は「学校におけるいじめや校内暴力に対して学校は、家庭や地域社会との緊密な連携の下に、真剣な取組の推進に努めること。また、学校においては、登校拒否及び高等学校中途退学の問題について十分な認識を持ち、適切な指導が行えるよう一層の取組を行うこと」。3つ目は「体罰禁止の徹底に一層努める必要があること」である。

そして、国連子どもの権利委員は、第4・5回日本審査と最終所見（2019年）で、特徴的な指摘を2点行った。1つ目は、ストレスフルな学校環境から子どもを解放する措置を勧告した点である。2つ目は、社会の競争的な性格により、子ども時代と発達が悪されることなく、子どもがその子ども時代を享受することを確保するための措置を要請した点である。

〈参考文献〉

- アマルティア・セン/池本幸生訳（2011）『正義のアイデア』明石書店
- 甲斐田万智子編集/国際子ども権利センター編集/荒牧重人監修（2019）『世界中の子どもの権利をまもる30の方法：だれひとり置き去りにしない！』合同出版
- 子どもの権利委員会編（2019）『日本の第4回・第5回統合定期報告書に関する総括所見』
- 子どもの権利条約総合研究所編（2019）『子どもの権利研究 第30号』「子どもの権利の新たな地平/多様な背景をもつ子どもの権利/子どもの権利条約第4回・第5回統合日本審査と総括所見」日本評論社
- 日本弁護士連合会子どもの権利委員会編著（2017）『子どもの権利ガイドブック【第2版】』明石書店
- 野尻紀恵（2018）「食をともなう子どもの夜の居場所のケース・スタディー-社会関係の紡ぎ直しの検討-」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』31, P44-58
- 滋賀の縁創造実践センター（2017）「この子らを世の光に」『子ども食堂』滋賀の縁創造実践センター
- 鈴木庸裕編著（2018）『学校福祉とは何か』ミネルヴァ書房
- 辻浩（2017）『現代教育福祉論：子ども・若者の自立支援と地域づくり』ミネルヴァ書房
- テス・リッジ/渡辺雅男監訳（2010）『子どもの貧困と社会的排除』桜井書店
- レイヴ&ウェンガー/佐伯胖訳（1993）『状況に埋め込まれた学習』P10-12産業図書
- ルース・リスター/松本伊智朗監訳（2011）『貧困とはなにか-概念・言説・ポリティクス-』明石書店

「学校における子どもの困難に対して家庭や地域社会との緊密な連携の下に、真剣な取組の推進に努める」こと、「ストレスフルな学校環境から子どもを解放する」こと、「子どもがその子ども時代を享受する」こと、これらにおいて「にしまる一む」の取り組みは、子どもの権利の視点からも重要な実践であると捉えることができる。

おわりに

「自覚者は責任者」は、糸賀一雄の語である。何かの課題に気が付いたとき、気が付いた人間がやるのが、気が付いた人間の責任だ、ということである。地域に生きづらい子どもがいることを、学校の教職員が感じ取った、そして地域住民が発見した。そこに「にしまる一む」の活動が生まれた。その「場」においては、あたたかさや、会話や、気遣いが行われ、子どもに対する見方、接し方、捉え方をもっと大事にしていきたいという大人の思いが醸成され、その思いに子どもが包まれている。

「にしまる一む」の活動は、子どもを中心につながりをつなぎ出し、誰もが排除されないという基盤を、地域とともに学校が創りあげていく挑戦なのだと思う。

3 「中学校内の居場所サミット 2024」 報告

2024年9月16日、豊島区立西池袋中学校にて「中学校内の居場所サミット2024」を開催、約200人の参加がありました。参加者は「にしまる一む」を見学し、居心地を体験しました。都内の中学校3校の実例紹介と交流会のようすを報告します。



コメンテーター：NPO法人パノラマ 石井正宏 様
2011年から図書館を居場所にした交流相談を開始し、有給職業体験
バイターに取組む。2014年校内居場所カフェを開始。
2015年にNPO法人パノラマを設立し、横浜北部エリアで小学生から
中高生ひきこもりまで途切れない支援の構築をミッションに活動し
ている。

2023年5月
豊島区立西池袋中学校内に
「にしまる一む」が、誕生しました。
生徒誰でもが利用できる
居場所「にしまる一む」の実践報告と
他校で先駆的に活動する皆様が
実例を紹介していただきます。
学校×地域の連携協働について
共に考える機会にしたいと思います。

中学校内の居場所 サミット 2024

参加費
無料

9.16

 月曜
祝日

14:00~16:00

豊島区立西池袋中学校 体育館
(東京都豊島区西池袋4丁目7-1)

プログラム

1. はじめのことば 豊島区長 高際みゆき 様
2. 実践報告
 - ・西池袋中学校「にしまる一む」実践紹介
 - ・生徒の声
 - ・にしまる一むの価値と課題
 - ・学校内の居場所づくり 豊島区教育委員会 教育長 金子智雄 様
 - ・生徒のための学校づくり 西池袋中学校 校長 八尋崇 様
 - ・応援団からのエール にしまる一む応援団 大津裕二 様
3. 実例紹介
 - ・西東京市立柳沢中学校「ヤギカフェ」
柳沢中学校放課後カフェ実行委員会 小松豊明 様
毎月2-3回程度を目処に、地域のボランティアを中心に調理室で開催
 - ・足立区立花保中学校「ASK」
花保中学校学校運営協議会 会長 大山光子 様
ASK (学校連携事業) 現場責任者 中井征弥 様
週に1回、空き教室にて大学生中心に居場所提供と学習支援を実施
 - ・板橋第三中学校「SBSルーム」
板橋区立板橋第三中学校 校長 武田幸雄 様
「家庭でも教室でもない第3の居場所」として運営4年
4. 公開情報交流会 知識や経験をみんなでシェアリング
5. おわりのことば 西池袋中学校運営協議会 佐藤尚秀 様

<参加対象>
学校内の居場所づくりに
関心のある皆様

<定員>
300名



お申し込みは
こちらから
<https://00m.in/wakuwaku0916>

主催：認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク 協力：豊島区立西池袋中学校
助成：公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 後援：豊島区教育委員会

● 「にしまる一む」実践報告 *豊島区立西池袋中学校

にしまる一む

中学生の居場所づくりモデル事業

認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
本間 優輔



西池袋中マスコットキャラクター
「にしまる君」+「ルーム」
=「にしまる一む」!

何をしても、何もしなくてもよい居場所

不登校予防支援に地域の力を!

- 2022年春、コロナ禍で不登校生徒が激増
「地域の力も借りて、不登校の予防支援を!」
佐藤高彦前校長、教育委員会、WAKUWAKU、
三者共催で学校内居場所づくりが始動。
- 2023年5月「にしまる一む」オープン

2部制で運営

- 時間帯を分け、2部制で開室。
1部は学校に行きづらい、教室に入りにくい生徒に配慮した運営。
2部は、放課後に友達とボードゲームをしに来る生徒や、のんびりと絵を描く生徒、学校や塾の課題に取り組んだり、試験前は教え合いながら勉強している。普段関わることのない生徒たちがつながったり、教室では見られない生徒の良さや得意なこと、意外な面に気づき合える場でもある。
特別支援学級や外国ルーツの生徒も参加し、多様な生徒の交流拠点となっている。

教え合って勉強中



「人生ゲーム」も人気!

開設時期：2023年5月
開設場所：生徒玄関前のホール
運営：豊島区教育委員会×西池袋中学校
×NPO豊島WAKUWAKUの共催
開室日：原則毎週月・火・金曜日（2部制）
1部 13:30~15時（教室に入りにくい生徒が利用）
2部 15:30~17:45（だれでも）

利用状況

- 週1回の開室から、週2回へ。
さらに2023年度3学期からは週3回に拡大。
1回平均約39人の利用。
2023年度（52回開催）：のべ1962人
2024年度*（84回開催）：のべ3245人
*4月~2月時点
● 1部はこれまで13名の生徒が利用

「にしまる一む通信」発行

- 3か月に一度「にしまる一む通信」を配付。
開室カレンダーのほか、保護者への連絡事項も記載。



「セーフゲーディング」の掲示

●「セーフゲーディング*」を室内に掲示し、生徒が安心・安全に過ごせるよう、スタッフの責務を確認、見える化した。

*「子どものセーフゲーディング」

関係者による虐待や搾取など、子どもの権利に反する行為や危険を防止し、安心・安全な活動と運営を目指す組織的取り組みです。疑念が生じた場合の対応と再発防止も含む包括的なものです。(公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンHPより抜粋)

運営スタッフから

WAKUWAKUでは、いくつかの居場所支援をしています。つながることができる子どもたちは、ほんの一握りです。学校という普遍的で身近な所に「にしまる一む」のような居場所があることは価値あることだと思います。

このような居場所支援が広がり、多感な時期を過ごす子どもたちの支えのひとつになればと思いつつ活動しています。

「にしまる一む」でみなさんが 安心・安全に過ごせるように

～セーフゲーディング(にしまる一むスタッフの責務)～

にしまる一むでは、みなさんが安心・安全に過ごせるようにすることが、スタッフの大切な役割だと考えています。身近な大人から傷つけられたり、つらい気持ちになることがないよう、みなさんの声に耳をかたむけて一人ひとりを大切にします。

スタッフからの約束

にしまる一むでは、みなさんが安心・安全に過ごすことができるよう、スタッフが守るべきルールがあります。にしまる一むを通じて接するみなさんに、次のような約束をします。

体罰や暴言によって傷つけることはしません

一部の人だけを特別扱にする、えこひいきや差別をしません

人格を傷つけることはしません

困っているときに、見て見ぬふりをしたり、危険を放置したりしません

不必要に身体を触ったり、性的な行為や誘いは絶対にしません

性差別をしません

個人的に連絡先を交換しません

自分でできることを必要以上に手伝いません

こんなときは必ずお知らせしてください

ケガをした

体の具合が悪くなった

にしまる一むに来るのがつらくなった

大人の人やほかの子からいやなことをされた

スタッフが「スタッフの約束」を守らなかった

他にも誰にも相談できずに悩むこともあるかもしれません。そういう時こそ、にしまる一むのスタッフはみなさんの声を聴き、一緒に考えたいと思っています。また、私たちスタッフにも話しにくいことがあれば学校の先生など身近な大人に相談してください！



●「にしまる一む」利用生徒の声

「にしまる一む」ができる前とできた後で、学校生活に違いはありますか？

- 悩みとか話しづらかったし、みんなと交流する場がなかったけれど、「にしまる一む」ができた後は、スタッフさんにいろんな話ができるようになった。いろんな学年の人と仲良くなれて楽しいです。
- 今までは学校終わったらさっさと帰宅だったけど、友達と遊ぶ場所ができたし、学校来れてない子と一緒に遊べるのもいいですね。
- ここでちょっと一息ついてから帰れるようになった。ここで1回休憩できると、部活の疲れがリフレッシュされる。
- ほかの学年と新しい交流関係ができる。

「にしまる一む」に先生じゃないおとながいることの意味ってありますか？

- 先生と友達の間みたいな感じ、一緒に遊んだり、先生より気軽に相談できる。
- こうしてちゃんと自分のことが話せる。

「にしまる一む」があつて良かったと思うことはありますか？

- その日にあった悩みとかを全部聞いてもらえるし、コミユカも高まったように思う。

● 学校生活で嫌なことを言われると傷ついてたけど、ちょっと我慢してスタッフの人に言えるようになった。

- 友達を待ってるときに、何も無い場所だと退屈だけど、「にしまる一む」で「人狼ゲーム」とかランプをしながら待てる。
- 暇なときに行って、したいことができるっていい。
- 「なんじゃもんじゃ」とかいろんなゲームができる。
- 集中して勉強もできる。

● 1部利用生徒の声

「にしまる一む」があつて良かったのは、学校に来れるようになったこと。

小学生の頃から不登校で、中学生になって1年の始めは週に1回教室に行ってたけれど、教室にいると緊張して辛かった。でも「にしまる一む」ができたから2年生になっても学校に来れている。

大人と普通の話ができる時間って特別。私は、家の人ともあまり話さないし、先生とは日常会話はしづらいから、「にしまる一む」の人と普通の話ができることがうれしい。「にしまる一む」にいる時は自分から他の生徒に話しかけたりもする。「にしまる一む」に来る子は優しい子だと思ってるから自分から話せる。

生徒制作「にしまる一む」紹介パネル



他学年とも仲良くなれる！

いろんな人と交流できる！

ちょっと休憩する場所！

落ち着かない時は……「にしまる一む」！

ホッと落ち着ける場所

優しい人がいっぱい！

第三の家です

年上の方とおしゃべりができて楽しい！

「第18回社会貢献活動見本市 - 地域活動が次世代に何を残せるか」にて展示 (2024年2月24日)

●「にしまる一む」へのメッセージ

次なる一歩をとる

豊島区長 高際みゆき

西池袋中学校内の居場所「にしまる一む」は、昨年5月にスタートし、1年間でのべ3000人の子どもたちが利用してくれました。親や先生ではない大人と会話できる、何をしてもいい、何もしなくてもいい心地よい居場所は、子どもにも大人にも大事です。

「にしまる一む」は、ひとりでのんびり過ごしたり、誰かと話したり、「教室には行けないけど、ちょっと寄ろうかな」と、不登校の予防になるような、ほっとできる場所になりました。子どもに寄り添った活動に感謝いたします。

豊島区では、登校支援室「道の駅*」にも力を入れています。スクールカウンセラーも全校に配置できました。学校と連携し、次なる一歩、子どもたちのために何ができるかを、本日の経験を共有し、ともに考えてまいりましょう。

*「道の駅」：西池袋中に2024年9月開設。午前中から利用できる登校支援室。教員が常駐し進路相談にも応じる。区内中学校に配置予定。

地域と学校で育んだ「にしまる一む」

豊島区教育委員会教育長 金子智雄

豊島区の22校すべての小学校には、校内に児童館を組み込んだ「スキップ」という場がありますが、卒業した子どもたちは、児童館「ジャンプ」に行きたくても区内に2か所しかありません。

対策を模索するうちに不登校や心を病む子がでてきました。そこに、佐藤高彦前校長、WAKUWAKUさんからの提案を受け、豊島区の「中学校の居場所づくりモデル事業」として「にしまる一む」を開設しました。

スタート時は、不登校対策や予防になる確信はなく半信半疑でした。先生方や地域の方も「何ができるの?」と、違和感があったと思います。いまでは、みなさんの理解と支援のおかげで、子どもたちがお茶を飲みながら、心落ちつく居場所になってきました。決断をして良かったと本当に思っています。感謝申し上げます。

生徒のための学校づくり

豊島区立西池袋中学校 校長 八尋 崇

「にしまる一む」の顕著な成果は、新たに不登校となる生徒数が減ったことです。「にしまる一む」でガス抜きができてきているのかもしれませんが。

学校づくりは生徒が主体です。地域の中で子どもたちが主体的に活動し、地域の核となる学校をつくりたい。今後は「にしまる一む」と「道の駅」の情報交換も必要です。学校の不登校支援と居場所との接続にも注力したいと考えています。

「にしまる一む」応援団 大津裕二氏

地域と学校が連携し、現役父兄も参画して、子どもたちの心にゆとりがもてるような居場所をみなで育んでいきましょう！

プレーパークからつながった子どもの声

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長 栗林知絵子

私は2003年から、遊び場「プレーパーク」を運営しています。2011年に遊びに来ていた中学3年生からのSOSを受け、運営スタッフの大学生とともに受験サポートをはじめたことから「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」がスタートしました。

プレーパークに、いつも土日に来てくる3兄弟がいました。朝に来て、決まった時間になると3人で帰るので、不思議な兄弟だと思っていました。のちに、彼らは仕出し弁当店を営む祖父母に育てられていて、寝たきりの母の介護と返却された空の弁当箱を洗う手伝いのために帰るのだと知りました。

「学習支援にもおいでよ」と声を掛けましたが、祖父が許可してくれないのです。

そこで祖父を説得し、「子ども食堂」や「学習支援」「WAKUWAKUホーム」など子どもの居場所を利用できるようになりました。

2022年に開催した「椎名町長崎小円卓会議」に、3兄弟の末っ子N君を招き、「子どもの居場所としてどんな場所があるとよかった?」と聞きました。N君は「児童館のような場所。なぜなら児童館や公園（公共施設）なら、祖父は行っておいでと言ってくれるけど、子ども食堂は理解してもらいたくない」と話してくれました。

そこで私は、中学校内に居場所があれば、どんな生徒も来やすいのではないかと、すべての子どもが立ち寄れる場所をつくりたいと思いました。

生徒が評価や比較をされることなく、先生や親以外のおとなに出会い肯定される居場所が、区内すべての中学校に広がることを願っています。



●実例紹介 ①西東京市立柳沢中学校

*サミット報告資料より抜粋

やぎカフェ

柳中放課後カフェの取り組み

西東京市立柳沢中学校 放課後カフェ実行委員会
小松 豊明



生徒投票で
「やぎカフェ」
に決定!

地域のボランティアを中心に、調理室で開催

西東京市子ども放課後カフェ

●中学生が放課後にゆったりと過ごせる「放課後カフェ」を校内にて地域の大人が実施することで、子どもとおとな、地域のおとな同士がつながり、市内で起きた痛ましい事故・事件が二度と起こらないように防止を図る。(西東京子ども放課後カフェ・活動目的より)

西東京子ども放課後カフェ

<https://nishitokyo-afterschool.jimdofree.com/>

- 2015年7月開始(田無第一)
- 既実施校(市内9校中): 田無第一/青嵐/ひばりが丘/保谷/柳沢/田無第三/田無第四

柳沢中学校における取組

- 柳中放課後カフェ: 2018年2月に開始
- 生徒から愛称募集⇒「やぎカフェ」に決定

【実績】

- 2018年度: 36回開催(夏休み中3回)
来場生徒数: のべ1,652人(平均約46人)
1年生574人、2年生531人、3年生547人
- 2019年度: 33回開催(同上)
来場生徒数: のべ2,233人(平均約68人)
1年生739人、2年生565人、3年生929人

開設時期: 2018年2月

開設場所: 調理室

運営主体: 柳中放課後カフェ実行委員会

開室日: 月2~4回

15:30~17:30(変更あり)

開催趣旨

●授業が終わった後の校内で、子どもたちがほっとできる居場所をつくり、地域の大人とふれあう機会を設けることにより、子どもたちと大人の信頼関係が深まります。

放課後カフェの運営を通して、地域全体で子どもを見守る、そして子どもたちが健やかに育ち成長する環境をつくりたいと考えています。

●これは、西東京市の「子育て・子育てワイワイプラン」(平成27年~令和6年)の

「子どもは次代を担う大切な社会的存在であり、健やかな子どもの育ちは市民全体の願いです。職場や地域など社会全体が協力し、おとなたちが連携しながら、地域の人的環境・社会環境・自然環境の整備などをすすめます」



という基本理念の実現にも寄与するものと考えます。

運営経費

【支出】飲料/氷/文房具/備品ほか

2018年度 61,218円

2019年度 97,804円

2023年度 82,037円

【収入】

助成金(YS市庭コミュニティ財団/キリン財団/西東京市/社協)

現金寄付(個人)/PTAからの補助金

物品寄付(Amazonほしいものリスト/直接持ち込み/フードドライブ)

運営体制

- 運営主体：柳中放課後カフェ実行委員会
- 協力団体：新町柳沢青少年育成会／ホニホニおやじの会／民生児童委員／柳沢中学校 PTA／PTAコーラス・ハモニーあい／NPO団体MURP（武蔵野大学）

※特定の団体が団体として実行委員会を運営しているわけではなく、メンバーはあくまでも個人的な関わり。LINEメンバー：28名

- 1回あたりのスタッフ数：平均6.2人（2023年度）

毎月チラシを掲示（配付）



カフェの看板は美術部生徒作！



いつもやぎカフェで楽しい時間を過ごしています。みんなと遊んだりしゃべったりすると、すぐに「もう終わり」ってなっちゃいます。これからもやぎカフェをみんなの憩いの場にしてください

会場は調理室



運営メンバー。校長先生も一緒に

放課後カフェの役割

- 子どもたちがほっとできる時間と場所
- 地域に開かれた学校へ
- 子どもたちと地域のおとなのつながり

【課題】

- ・運営スタッフの固定化（⇒学生の参加！）
- ・資金調達（＝まあ、なんとかあります）
- ・相談機能、不登校対策にはなっていない

運営スタッフの声

- 男子バスケット部のみんなはとても礼儀正しいです。遊ぶ時はメッチャ遊んで、カフェを去るときは「ありがとうございました!」と、ちゃんと言ってくれます。男子バスケット部が去ったあとは私達はさみしくなります。
- 美術部の子たちはいつもノートや紙に素敵な絵（イラスト）を描いてプレゼントしてくれます。嬉しい（飾ってあります）。
- 中には時間が許す限り生徒たちと一緒にゲームをしている先生もいます。成績を付ける人とつけられる人ではない関係でいられるカフェは、貴重だと思います。
- カードゲームを教えてくれる子もいます。私がスピードに乗れずにモタモタしていても、笑顔で合わせてくれる子。優しいなーって、思います。
- なにか激的な支援はできないかもしれませんが、子どもたちにとって「いたい場所」になっていると実感します。行きたいときに行ける、ただいだけいられる場だと思います。



● 事例紹介 ② 足立区立花保中学校

* サミット報告資料より抜粋

ASK (After School Katariba)

足立区立花保中学校との協働活動について

足立区立花保中学校 学校運営協議会会長 **大山 光子**
NPOカタリバ 学校連携プロジェクト担当 **中井 征弥**



週1回、大学生を中心に学習支援と居場所提供

花保中×NPOカタリバの連携

- 三者の想いが合致し、連携がスタート
- ◇ 学校運営協議会
「コミュニティスクールになるが、花保中として動きについては検討中」
→ 放課後の学び場づくりに協力できるのでは
- ◇ 花保中学校
職員会議中の空いた時間の有効活用 & 問題行動等防止
→ 区内の居場所施設に通えない生徒にも、学校で学習と居場所 (+α) の機会に繋げたい
- ◇ NPOカタリバ* (アダチベース)
行政委託以外の子どもたち (= 隠れた要支援層) へのリーチ、既存事業のノウハウ展開
→ 校内での「ナナメの関係」による学び・居場所空間の実践、区内での重層的セーフティネットづくり

開設時期：2021年9月 (学習支援スタート)
2022年7月 (居場所支援スタート)
開設場所：パソコン教室 + パソコン準備室改修
運営主体：学校運営協議会 × NPOカタリバ
開室日：水曜日昼休みと放課後 (17:00まで)
ほか長期休み対応あり

取組みの目的と価値

学校

- ① 教職員の負担軽減
- ② 子どもたちの多面的な様子を承認
- ③ 学校の魅力化



三方良しの事業作り



子どもたち

- ① 学習環境と学習習慣の形成
- ② 安心安全の居場所
- ③ 多様な大人との出会い
主体性の育み

コミュニティスクール/地域

- ① 学校との接点
- ② 地域資源の増加
- ③ 地域のコーディネート
子ども関係人口の増加



ASK概要

After School KATARIBA		
	学習サポート	フリースペース
目的 WHY	学力向上 学習自律度の向上	自己肯定感向上 安心/自信/希望の価値提供
何を WHAT	自学自習サポート 個別学習支援 ※ICTツールの活用含む	スタッフとの対話 コミュニティメイク 遊び・休憩
対象者 WHOM	ASK登録者(事前登録必要)/ 1年生～3年生	
いつ WHEN	① 昼休み 水曜 13:00 - 13:30 (週1) ② 放課後+長期休み(2日程度) 水曜 14:30 - 17:00 (週1)/+α長期休み2日程度	
どこ WHERE	パソコン教室	ochanoma ※パソコン準備室を改修
誰が WHO	職員1名・学生インターン1名・ボランティア5名	

現在の取り組み

- 安心安全の居場所作り：おせっかいなスタッフによる受け入れ、一人でも来られる場所
- 校内循環：昼休みの時間などカタリバスタッフによる校内循環を通して①居場所への呼び込み、②外部人材が当たり前にいる学校作りの機能を担う
- 子どもたちを多様な大人が見守る体制作り：先生方との情報連携（月1での情報交換会、ノンフォーマルな情報共有）

学習サポートとフリースペースの併設

- A面としての「学習サポート」、B面としての「フリースペース」を併設：目的性のある居場所と無目的な居場所

学習サポート



- 部屋の出入りは自由。
 - ・自分のペースで、学習の部屋とフリースペースを行き来が出来る
 - ・スタッフも、子どもたちと同様に臨機応変に行き来をしている

フリースペース ochanoma



気付き①：その子にとっての居場所”感”のきっかけは、フリースペースであることもあれば、学習であることも。→無目的な場所が良い人/時もあるれば、目的のある場所が良い人/時もある。

気付き②：学習の部屋もフリースペースも、同じスタッフに関わることによって、人を起点とした居場所作りとその先の挑戦につながっていく。学習きっかけで来館をしていた子が、徐々に他学年と交流しプロジェクト活動をするように！

*NPO法人カタリバ「アダチベース」

2016年から足立区の中高生を対象に、居場所運営／学習支援／体験プログラム／食事提供／学校連携／地域連携（地域のNPO等との連携）などを行う。区内2か所に拠点を置き活動。

未来は、つくれる。
KATARIBA
Shape the Future

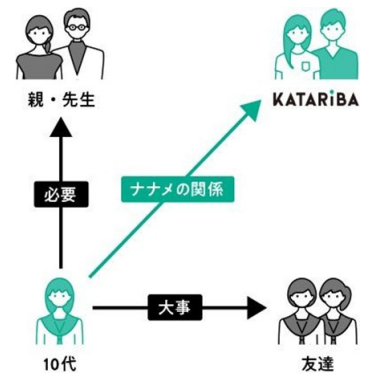


人材の採用と育成

- カタリバスタッフとしての採用要件と定期的な研修機会 / チームビルディング

- 親でも先生でも友達でもない、子どもたちの半歩先で半歩外を歩く大人としての関わり「ナナメの関係」を体現する人材の採用と育成

- ▶ スタッフの初期研修と定期的な研修会実施



居場所運営で課題と感ずること

- **協働**：多様な立場による協働……先生方、地域の方々の関わりしるをどう作っていくか→持続可能/展開可能な取り組みへ
- **予算**：子どもたちのプロジェクト活動/イベント活動にどう予算を付けていくか……開かれた学校作り協議会予算、CS予算からの拠出→教育的価値の見えにくい取り組みへの価値訴求
- **対象**：ターゲットアプローチ……ニーズ（潜在的/顕在的）のある子どもたちにどうつながっていくか

今後の展開の芽

- 支援する-されるの関係の循環

- ①先輩-後輩の関係性
- ②卒業生の関わり

- ユースワークによる子どもたちの主体性の育み

- ①ochanoma開設時の地域×NPO×学校×子どもの4者協働
- ①通常運営時のプロジェクト活動
- ②長期休みや季節行事に際するイベント開催

- ▶ **長期休暇期間の運営の一例**
（上）地域の皆さん主導での料理教室（下）地域の皆さんに見守られながら、すいか割を実施





● 実例紹介 ③ 板橋区立板橋第三中学校

SBSルーム

新たな不登校を生まないための部屋へ

板橋区立板橋第三中学校

校長 武田 幸雄

「家庭でも教室でもない第三の居場所」の確保を

SBSの意味

- 生徒に向けて
Step By Step (一歩ずつ、少しずつ)
- 教員に向けて
Stand By Student (生徒に寄り添って)

開設時期：2021年

開設場所：多目的室と併用

運営主体：校務分掌に「SBS担当」設置
(教員、SC、SSW、学習指導員、
特支教室支援員等)

開室日時：毎日/登校時間から6時間目終了時

運営と概要

● 令和3年に設置。当初の設置理由は「不登校対策（現に不登校の生徒への支援）」だったが、4年目の現在は上記に加え「新たな不登校を生まないための部屋」へとシフト。

● 開室は基本的に毎日。朝の登校時間から6時間目終了時まで。

スタッフは、ボランティアのみ（保護者・PTA・OB・学生・寺子屋運営者・児童館長など7名の方が不定期に支援に来室）

● 学校は教員のほか、SC、SSW、学習支援員、特支教室支援員等が不定期に来室し、報告・連絡・相談のほか、学習支援や雑談、ゲームなどをともにこなす。

● 校務分掌に「SBS担当」を設置、窓口の一本化。

● 本年度は、約25名の生徒が利用。内訳は（1年生と2年生が各5名、3年生が15名）

過去16名の生徒が巣立ち、いずれも進路を決めている。

教員側のコンセンサス

「何もさせない（見守る）勇気」

「教室復帰を目指させない覚悟」

最終的に教育の目的は「人格の完成」（教育基本法第1条）にあり、「教室で授業を受けること」はそのための手段の1つに過ぎない（手段と目的を混同しない）。SBSの目的は、いわゆる「別室」としてではなく、教室でも家庭でもない「第3の居場所」の確保。学校に来ることさえできれば、面と向かって話ができ、何らかのアプローチができる。

利用状況

生徒の利用は、「朝から放課後までSBS」「授業（時間）によってSBSか教室」「昼前に登校してきてSBS」「登校できる日は限られるが、登校した際はSBS」「区の不登校支援室とSBSを掛け持ち」などさまざま。

生徒側のコンセンサス

たった1つの校則『Be Gentleman（紳士であれ）』に準じた部屋の利用

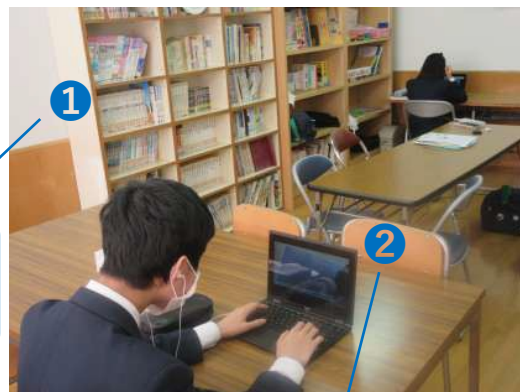
目標は先生が決めるのではなく自分が決める（教室復帰の可否・卒業後の進路など）

多目的室と併用のSBSルーム

- 安全確保のためQRコードリーダーを導入
生徒は入退出時にQRコードをタッチする。

③ 基本的には、自主学习や配信授業、読書、イラストを描くなど、静かな活動

① 各種書籍・問題集・教科書・高校案内などを書架に常備



② 1人1台の端末利用で、双方向型の遠隔授業に参加できる



④ 大型モニターを常設。学校行事などを配信

⑦ ボードゲームやカードゲームを常備

⑤ ソファとカーペットを常設し、リラックスして使えるよう配慮

⑥ 卓球台を置き、運動をしたい生徒が利用



◆NHK首都圏ネットワーク「不登校からの卒業」の視聴

「SBSルーム」は新聞社をはじめ、マスコミに取材を受ける機会も多く、2023年10月、「NHK首都圏ネットワーク」の番組内で紹介されました。

「不登校を未然に防ぐ

「学校内」に自由に過ごせる“場所”を
板橋区の中学校」

(こちらの紹介記事は「NHK首都圏ナビ WEBレポート」から閲覧可能)

NHKの取材はその後も続けられ、生徒たちの卒業までの記録を制作。2024年3月22日「首都圏ネットワーク」で放映された映像をサミット会場で視聴いただきました。

「不登校からの卒業」

子どもたちの居場所、「ステップ・バイ・ステップ=SBSルーム」と呼ばれる部屋



●公開情報交流会 事例紹介校*知識と経験シェアリング

柳沢中学校：放課後カフェ実行委員会 小松豊明氏

花保中学校：学校運営協議会会長 大山光子氏

ASK（学校連携事業）現場責任者 中井征弥氏

板橋第三中学校：校長 武田幸雄氏

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長 栗林千絵子

コメンテーター：石井正宏氏（NPO法人パノラマ理事長）

2011年から図書館を居場所にした交流相談を開始し、有給職業体験パイターンに取り組む。2014年「校内居場所カフェ」を開始、横浜北部エリアで小学生から中高生、ひきこもりまで、途切れない支援の構築をミッションに活動。

●石井 4月から「校内居場所カフェ全国ネットワーク」の運営をはじめました。全国の校内カフェと交流し、広げる活動をしています。

今日は校内居場所について、4つの事例紹介がありました。「にしまるーむ」と「ASK」は、NPOが運営に関わる居場所です。「ヤギカフェ」は住民主体で、市民活動が実行委員会形式で運営されている居場所です。そして、教職員だけで運営する「SBSスクール」もあります。

多くの選択肢が紹介されましたが、どの形であれば実現可能なのかを検討するため、公開情報交流会を進めていきたいと思えます。

地域運営体制のメリットとデメリット

まず、地域住民が運営する「ヤギカフェ」のメリットとデメリットを教えてください。

●小松 メリットは、あくまで地域のおじさんやおばさんの発案で子どもの居場所づくりをスタートさせた点です。この形を大切に、地域でできる関わり方というスタイルを崩したくないと思っています。

一方で、デメリットとしては、相談業務や不登校対策を行う場合、授業時間帯にも実施する必要があり、地域の大人だけでは難しいという点があります。これを実現しようとすると、人員体制や資金確保といった、より高度な問題が生じてきます。

●石井 「ヤギカフェ」のミッションは、地域の人々との出会いの場をつくることだと感じますね。

全国ネットワークでつながる校内居場所の中には、



体育館に集まった参加者は約200人。各校の事例報告や情報交換を熱心に聴講いただきました

教員だけで運営されている場所も3校ありました。「SBSスクール」もそうですね。

●武田 「SBSスクール」もスタート当初はNPOが関わっていました。現在も教職員だけでなく、地域の人やPTAのOB、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、支援員など、さまざまな人が力を貸してくれています。



武田校長（板橋第三中学校）

ただ、必ずしもきちんと運営しているわけではなく、誰も来ない日もあったり、ゆるやかな形です。

NPOが関わっていたころも、平日午前中の週2日しか関与しなかったことを考えると、「SBS」は月曜日から金曜日の朝から夕方まで開いていても、問題はありませんでした。

教職員が中心ではありますが、実際は多くのボランティアが支えてくれて運営できています。

学校内の居場所から 子どもを地域につなげる

●石井 子ども家庭庁ができる前に、有識者による研究会が開かれ、子どもの居場所をジャンル別に分類した表が作成されました。

〈下図：「居場所の現状と課題、及び提言」〉

この表には、児童館やプレーパークなど、「だれでも参加できる場所」、児童相談所などの「ハイリスクな子どものための施設」などが示され、「校内の居場所」はその中間に位置づけられています。

WAKUWAKUはプレーパークなどをすでに運営しているのに、さらに学校内に居場所が必要だと思った理由を教えてください。

●栗林 WAKUWAKUは、池袋小学校区で「子ども食堂」や「学習支援」を運営していますが、そこに参加している子どもたちは、偶然つながった子どもたちです。

西池袋中学校には4つの小学校区から生徒が集まっていますが、その中でWAKUWAKUが居場所を提供できているのは、1つの小学校区にすぎません。中学校内に居場所があることで、居場所がない地域の生徒ともつながることができます。

ほかの居場所とつながりたいと思う生徒がいれば、先生と確認したうえで、地域の「第三の居場所」を紹介します。これができるのは学校内で運営している強みだと思います。

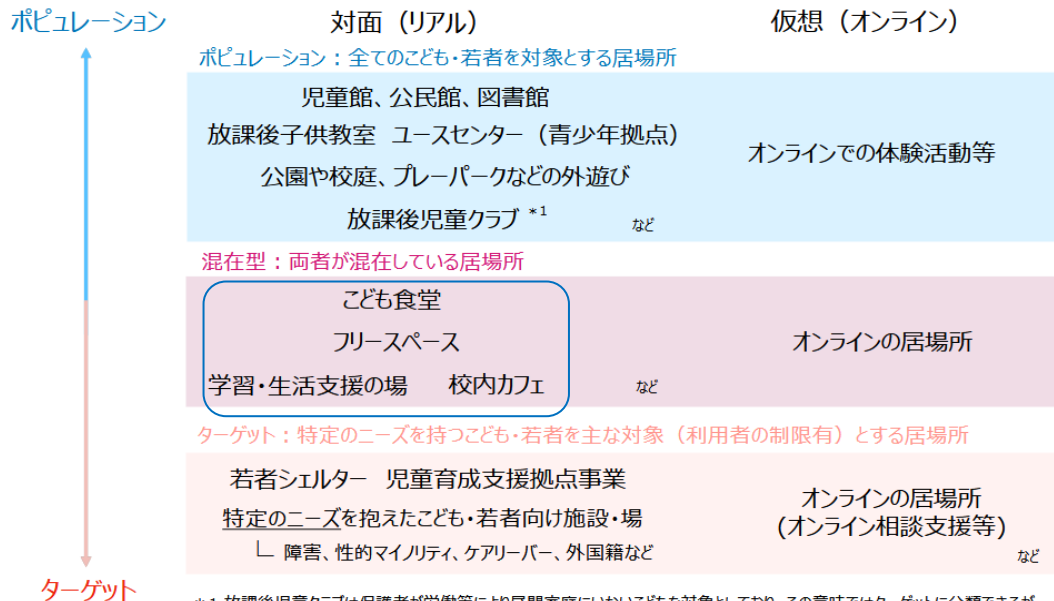
生徒を地域につなげることで、子どもたちが地域で活躍したり、救われることを期待しています。

居場所の現状と課題、及び提言

- 居場所の種類（分類） -

こどもまんが
こども家庭庁
*こども家庭庁は令和5年4月1日の設立です。

下記の軸は「対象」に基づき分類を試みたが、1つの居場所の中でも混在しており、濃淡がある。
重要なことは、さまざまなニーズや特性を持つ子ども・若者が、各々のニーズに応じた居場所を持てることである。



*1 放課後児童クラブは保護者が労働等により昼間家庭にいない子どもを対象としており、その意味ではターゲットに分類できるが、約139万人（令和4年5月現在）の利用者という規模から考え、ポピュレーションに分類

「こどもの居場所づくりに関する調査研究 報告書概要案」より
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_ibasho_iinkai/dai5/siryou1-3.pdf

●事例紹介校*知識と経験シェアリング

学校とNPOのつなぎ役になる キーパーソンと出会う

●石井 学校はNPOとつながるきっかけがなく、NPOも学校とつながるのは難しいと言われていました。その中で、花保中学の大山さん（学校運営協議会）のようなつなぎ役になるキーパーソンに出会うのはとても重要なことですね。

●大山 私は長年NPOを運営しながら、学校や地域にも関わってきました。その中で気付いたのは、子どもの声が反映されていないということでした。

どうしたら子どもの声を取り入れられるのか模索していたとき、カタリバ*さんとつながりました。

(*子どもや若年層を対象に年上世代とのコミュニケーションの場や学習の機会を提供しているNPO法人。2016年より足立区に「アダチベース」を開設)

「コミュニティスクールを始めるんだけど、どうかな？」とカタリバさんに声をかけてみたところ、協力してもらえることになったのです。

私たちは年齢を重ねますが、子どもたちは中学の3年間で巣立っていきます。子どものそばには、カタリバスタッフの大学生のような若い世代の人たちにいてほしいですし、子どもたちの声を社会に届けたいと考えました。

●中井 カタリバは足立区内に学校内と学校外、両方の居場所を運営しています。ただ、花保中学区か



左から小松さん（柳沢中学校）、大山さん、中井さん（花保中学校）

らカタリバが運営する校外居場所までは自転車で20分以上かかり、子どもが日常的に通うのは難しい状況です。そのような地理的な問題もあり、校内に居場所をつくりました。

また、学習スペースの方が適していると考える生徒は、まず校外の居場所につながり、その後校内の居場所に来るというケースもあります。

ですから、花保中学校内にASKが設置されたことは、大きなメリットだと考えています。

校内居場所開設は 「待たない支援」

●石井 校内居場所は、唯一、「子どもがいる場所に入って支援する」かたちです。他の居場所は、すべて子どもを待つ支援です。

私自身、ひきこもり支援を長年続けてきましたが、「ひきこもる前に会いたかった」という思いから、高校内カフェを始めました。しかし、実際に活動をしてみたら、「高校ではすでに遅い」と感じ、現在は小中学生向けの居場所を運営しています。

児童・生徒が集まる場所が「学ぶ場」であり、「ケアされる場」である必要が社会に生じていると日々痛感します。校内の居場所が、当たり前になることを目指して、活動をひろげていきましょう。



左からコメンテーター石井さん、栗林、本間（「にしまるーむ」スタッフ）

〈まとめにかえて〉 「つながりたい」と思う気持ち

特定非営利活動法人パノラマ
理事長 石井 正宏

経済格差が教育格差を広げていることが明らかになっています。つまり、学力で振り分けられる高校は、宿命的に社会階層化されており、底辺校や教育困難校と呼ばれる高校には、貧困を背景とした支援ニーズを持つ生徒たちが多く入学することになります。そのため、貧困支援等なんらかの支援を行う場合、ターゲットを絞ったアプローチが、居住地で振り分けられる中学校よりも、取り組みやすい特性を持っていると思います。

一方、公立中学は学区内にいるすべての子どもたちを全方位型で受け入れており、当たり前なことでありますが、義務教育なので入学した以上みんな最後まで在籍しています。ここに高校と中学の問題に対する向き合い方の違いがあるのではないのでしょうか。

その問題の象徴が「不登校」なのだと思います。データで見ると高校の不登校が小中学校よりも圧倒的に少ないので、高校は不登校が少ないと勘違いされがちですが、高校は不登校が続くと自動的に中途退学させられるため、カウントから落ちているだけのことです。

こんな言い方はしたくありませんが、「高校は義務教育ではない」ことを傘に、不登校に目をつぶり、中学校は義務教育であるため不登校を直視せざるを得ない。そんな中、不登校（あるいは未成年の自死）を通じて、これまでの学校の在り方を問い直す機会が、今訪れているのだと思います。

そして、この不登校であったり、学校が辛いと感じている児童・生徒たちの学びや遊び、そして休む権利を保障していくために、これまではなかった校内居場所に辿り着いているのだと感じています。

ただしこの要望は、どこから、誰のために来ているのか？ 学校が使命としていることと、NPO等が使命としていることには、まだ若干の乖離があるようです。

これが多様性を包摂する力になれば良いのですが、学校が学校的であり続けるための力になれば、水泡に帰する可能性もあります。このどこに向かうかの矢印を揃えて行くこと、そして別々の方向を指しているようで、実は同じ方向を指していることを確認し合うことが、この『中学校内の居場所サミット2024』の役割だったのではないかと感じています。これで終わりではなく、このように互いを知り、語り合える機会を重ねて行くことを願ってやみません。



校内居場所カフェ全国ネットワーク



中学校内の居場所サミット2024

「東京新聞」「日本教育新聞」に掲載されました。
どちらもWEBサイトから閲覧できます。

そのほか、参加された方々から、当日のようすや感想の報告もあげられています。
拡散いただきありがとうございます。



東京新聞 2024年9月13日



日本教育新聞
2024年9月23日



応援メッセージ

地域とともに成長する 新たな学校へ

豊島区立西池袋中学校 統括校長 八尋 崇

本校に着任し、まもなく一年が経とうとしています。さまざまな学校行事や校外学習を通して、生徒たちとのコミュニケーションもとれるようになり、だんだんと進むべき方向が見えてきたところです。

さて、不登校未然防止の部屋である「道の駅」が始まって半年が過ぎました。これまで教室に入ることの困難さを感じていた生徒や学校に来ることが苦痛だった生徒、さまざまな生徒がようやく笑顔を見せるようになり、支援してくれる大人への信頼も感じてくれているように思えます。

本校は、不登校対策を第一の課題とし、ここ数年取り組んで参りました。佐藤高彦前校長が尽力された「誰も取り残さない教育」の一環でもある「にしまる一む」の運営も、認定NPO法人「豊島子どもWAKUWAKUネットワーク」のみなさんの温かい支援のおかげで生徒たちにとって当たり前存在になってきました。学校に関わってくださる多くの方々のおかげで、生徒たちは学校をリラックスできる場所として認識してくれています。

学校は楽しいところ。そんな当たり前なことが、いつしかそうではない状況になってきています。全国的な課題としてさまざまな対策がなされている不登校施策ですが、なかなか難航しているのが現状です。そのような中、本校においてわずかながら改善が進んでいます。その理由は、間違いなく「人」です。教職員の意識、保護者・地域の人々の意識、そして生徒たちに関わってくれるすべての人たちの接し方が変わることによって、不安や困り感を抱えて

いる生徒は、安心や幸福感を取り戻していきます。

本校には、校内に「にしまる一む」があり、そこには温かく迎えてくれるスタッフがいます。現状を受け入れてくれる福祉的な関わりのNPO法人。将来を見据えてゴールを示し、背中を押す学校。この絶妙なコンビネーションによって、前に進める生徒がいることは間違いありません。

本校は、令和7年度から新たにコミュニティスクールとしてスタートします。地域のさまざまな専門家が集結し、生徒たちとともに地域も成長していく学校へと生まれ変わります。学校の中に地域が運営する居場所があるという強みを活かし、学びの多様化を目指す新たな学校のあり方のモデルとして、豊島区立西池袋中学校は、全国のトップランナーを目指します。

一人ひとりが尊重される居場所 「にしまる一む」を見守ります

豊島区教育部 放課後対策課長 村山 康介

「にしまる一む」は、令和5年に西池袋中学校に開設して以来、のべ3,000人以上の生徒のみなさんが利用しています。みなさんから、「親や学校の先生以外の大人と話す機会ができてうれしい」という声も届いています。これは、スタッフの方々が「にしまる一む」を訪れる生徒一人ひとりを尊重し、大切にしてくれているからだと思います。

心身ともに大きく成長する中学生にとって、親や先生ではない大人から尊重してもらい、自分を解放できる居場所が身近な校内にあるということはとて

も素晴らしいことです。

また、家庭や学校のほかに「にしまる一む」のような居場所が複数あれば、誰かに話を聴いてもらったり、心の逃げ場所になったり、不登校の予防にもつながるものと思います。

今年度、策定しました本区の新たな教育大綱には「子どもたちの声をしっかりと聴き、思いを受けとめ、子どもの学ぶ権利を保障する」と明記しています。今後も、「にしまる一む」が悩みの多い中学生のほっと一息つける場所となるよう、学校やNPO法人、地域のみなさんと連携・協力し、生徒たちの心の支えとなって成長を見守っていきます。

大人の本気を 子どもは見ている

豊島教育委員会教育長 金子 智雄

「にしまる一む」に関わってくださる全ての方に、まず感謝申し上げます。

開設にあたり「半信半疑」であったと申しあげましたが、絶対的確信をもっていたことが、ひとつだけあります。それは、子どもたちは大人がどこまで本気なのかをいつも見ている、ということです。

コロナの渦中で最も大変だった時期に、中学校3年間を過ごした卒業生が、卒業式の答辞において3年間をふりかえり、誰を恨むこともなく、家族にも先生方にも心からの謝意を涙ながらに述べました。

私も涙なしは聞けませんでした。どれだけ先生方が苦勞されたか、厳しい環境下でも何とかしよう

と試行錯誤された様子が目に浮かびました。

「子どもたちは大人の背中を、大人の本気をちゃんと見ている」と確信しました。

不登校対策として何が正解なのか誰もわからない中で、それでも「大人の本気」を形に表すために、まずは「にしまる一む」設置に進みました。「このままでいいんだ」と思っていないよ、というメッセージを子どもたちに伝えるためです。何か考えて、もがいているんだなと感じてもらえればいいと思いました。

4月には、豊島区の全ての中学校に、別室登校を支援する部屋ができ、西池袋中学校には区内初の「チャレンジクラス」も開設されますが、今後もまだまだ「大人の本気」を見せる必要があると思います。

教育長退任にあたり、すべての学びの場所、子どもたちの居場所が、多くの大人のみなさんのご尽力により広がり、充実されることを心からお祈りいたします。

頑張れ！ にしまる一む！



おわりに

地域から新しい〈フツウ〉をつくろう

「中学校内に居場所をつくるのは、容易なことではない。数年前、小学校内に居場所（学童保育と居場所）をつくったときも、さまざまな意見があり苦労した。時間をかけて、これまでの当たり前〈フツウ〉を変えていくしかない」

にしまる一むを始めたころ、豊島区の金子教育長からのエールでした。

2013年、この地域に「子ども食堂」をつくる時、さまざまな批判を受けたことを思い出します。「子どもにご飯を食べさせるのは親の仕事だ。子ども食堂などつくったら、親が怠けてしまう」。このような批判がある時代でした。

子育ては親の自己責任。「助けて」と甘えてはならない〈フツウ〉を何とかしたいと、多くの市民が子ども食堂をつくったのでしょ。2024年の調査では、子ども食堂が1万か所を超えました。子どもにおせっかいする市民が増え、子どもも親も地域に少し依存してよい〈フツウ〉が根付いてきたのではないでしょ。か。

その一方で、子どもにとって第二の居場所である「学校」は、まだまだ教職員の自己責任のもと、教員はだれかを頼ることなく、前例主義に基づく教育が〈フツウ〉とされているのではないか。先生が周囲を頼れない、それは苦しいでしょ。し、そこにいる生徒は息苦しいと感じるでしょ。う。

そんな自己責任、密室の教育をどうやって開いていくか？

まずは、少しだけでも風穴を開ける一助として「にしまる一む」がその役を担っているのかもしれない。「にしまる一む」がハブとなり、学校と地域が連携して楽しく交流する。

そこから先生の困りごと、生徒の声を聞けば、次の一手を差し伸べることができるのかもしれない。先生と生徒のありのままを受け入れる。それが校内居場所なのかなと思います。

学校の居場所づくりが広がり、子ども食堂を運営している人たちが「うちの学校でも居場所活動やっているよ」と語り合えるのが当たり前、それが〈フツウ〉になるには何年かかるかわかりませんが、今の息苦しい学校を変えるには地域のチカラが必要なのだと思います。

私たちは地域に根をはり地道に子どもたちが自分らしくいられる居場所を開いていきたいと思っています。みなさんと、新たなフツウを創っていきましょう。

認定NPO法人

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

理事長 栗林 知絵子

認定NPO法人

豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

地域の子どもの地域で見守り育てるために、「子どもの貧困」をテーマに子ども支援をしている。2012年設立。プレーパーク、子ども食堂（3か所）、無料学習支援、ホームスタート、WAKUWAKUホーム、シングルマザー交流会、不登校の親の会など活動は多岐にわたる。コロナ下では、住まいや仕事の相談、食材の提供（としまフードサポートPROJECT）に力を入れてきた。おせっかいの輪を広げ、地域が網の目のようになっていく仕組みを構築中。





認定特定非営利活動法人

豊島子ども
WAKUWAKU
ネットワーク

ご支援のお願い

豊島子どもWAKUWAKUネットワークは、2022年1月に認定NPO法人になりました。認定NPO法人へのご寄付は「寄付金控除」の対象になります。

当団体の活動は、みなさまのご支援に支えられています。広報やご寄付などのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

寄付で支援

- 継続的なご寄付：毎月 / 1年
- 都度のご寄付：いつでも、ご寄付いただけます

●HP・QRコードからお手続きください▶



お振込み

ゆうちょ銀行
記号：10100 番号：56396291

*他校よりお振込みの場合
店名 〇一八(018) (読み ゼロイチハチ)
普通 5639629
加入者名 トクヒ)トシマコドモワクワクネットワーク

*直接お振込みいただいた場合は、お手数ですが、お名前、電話番号、ご住所をメールにてお知らせください。

クレジットカード

各種クレジットカードを
ご利用いただけます

郵便振替

郵便振替：00170-5-728808

加入者名：豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

●HP・QRコードからお手続きください

賛助会員

年会費：賛助会員 1口 500円 (クレジットカードのご利用はシステムの都合上、2口1,000円~となります)

物の寄付で支援

- ブックオフコーポレーション株式会社「キモチと。」：買取金額が全額寄付になります。
- 「Amazonほしいものリスト」から
- 子ども食堂向けの食材や、無料学習支援向け教材などございましたら、ご連絡ください。

メルマガ登録

- 月1回発行し活動を紹介しています。ぜひご登録ください。



学校と地域の連携による
豊島区西池袋中学校内の居場所づくり
2024年度事業報告書

「にしまるーむ」によるこそ！

2025年3月8日 発行

協力：豊島区教育委員会/豊島区西池袋中学校/
西東京市立柳沢中学校/足立区立花保中学校/
板橋区立板橋第三中学校/NPO法人カタリバ/
NPO法人パノラマ

認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク

〒170-0011 東京都豊島区池袋本町一丁目28番1号
サンスプレnderキタイケ 102号

TEL：050-5526-1229

E-mail：info@toshimawakuwaku.com

HP：https://toshimawakuwaku.com/



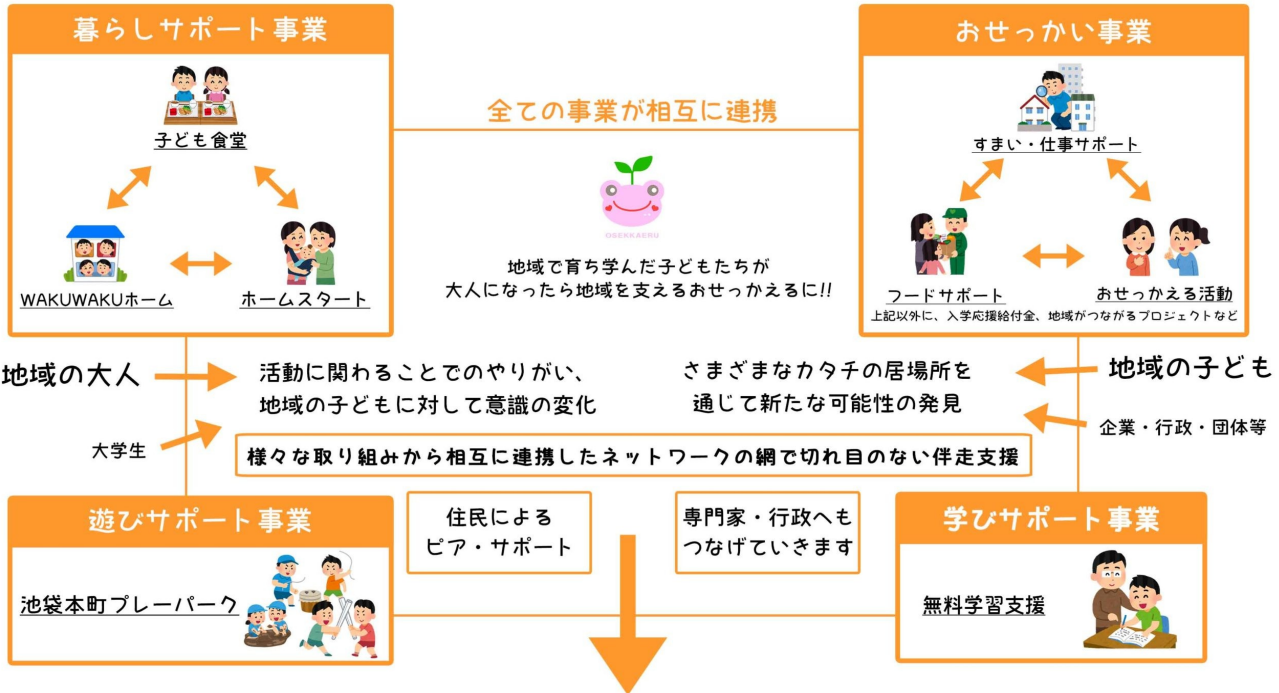
*この報告書は公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの助成を受けて制作しました



認定特定非営利活動法人

豊島子ども
WAKUWAKU
ネットワーク

地域の子どもを地域が見守るための主な取り組み



地域にいる、貧困、不登校、虐待、外国籍、障害など、さまざまな困難を抱え孤立した家庭を環境に左右されることなく、自分らしい人生を歩めるように、地域でのサポート体制

取り組み	名称・開催場所	開催曜日
プレーパーク	池袋本町プレーパーク(池袋本町公園内)	【毎日】
無料学習支援	池袋WAKUWAKU勉強会(区民ひろば池袋集会室)	【毎週】 月曜日
	クローバー(上池袋まちづくりセンター) ※親密に連携している別団体が運営	【毎週】 水曜日
	クローバー朋有(東池袋第二区民集会室) ※親密に連携している別団体が運営	【毎週】 木曜日
こども食堂	椎名町こども食堂(豊島区长崎)	【毎月】 第4日曜日
	池袋こども食堂(豊島区池袋)	【毎月】 第1・第3木曜日
	ほんちよこ食堂(豊島区池袋本町)	【毎月】 第2・第4火曜日
	要町あさやけ子ども食堂(豊島区要町) ※2022年度からは、WAKUWAKUから独立して活動	【毎月】 第1・第3水曜日
シングルマザーの交流会	シンママおしゃべり会	【奇数月】 第1日曜日
不登校の親の会	親の会	【偶数月】 第1日曜日